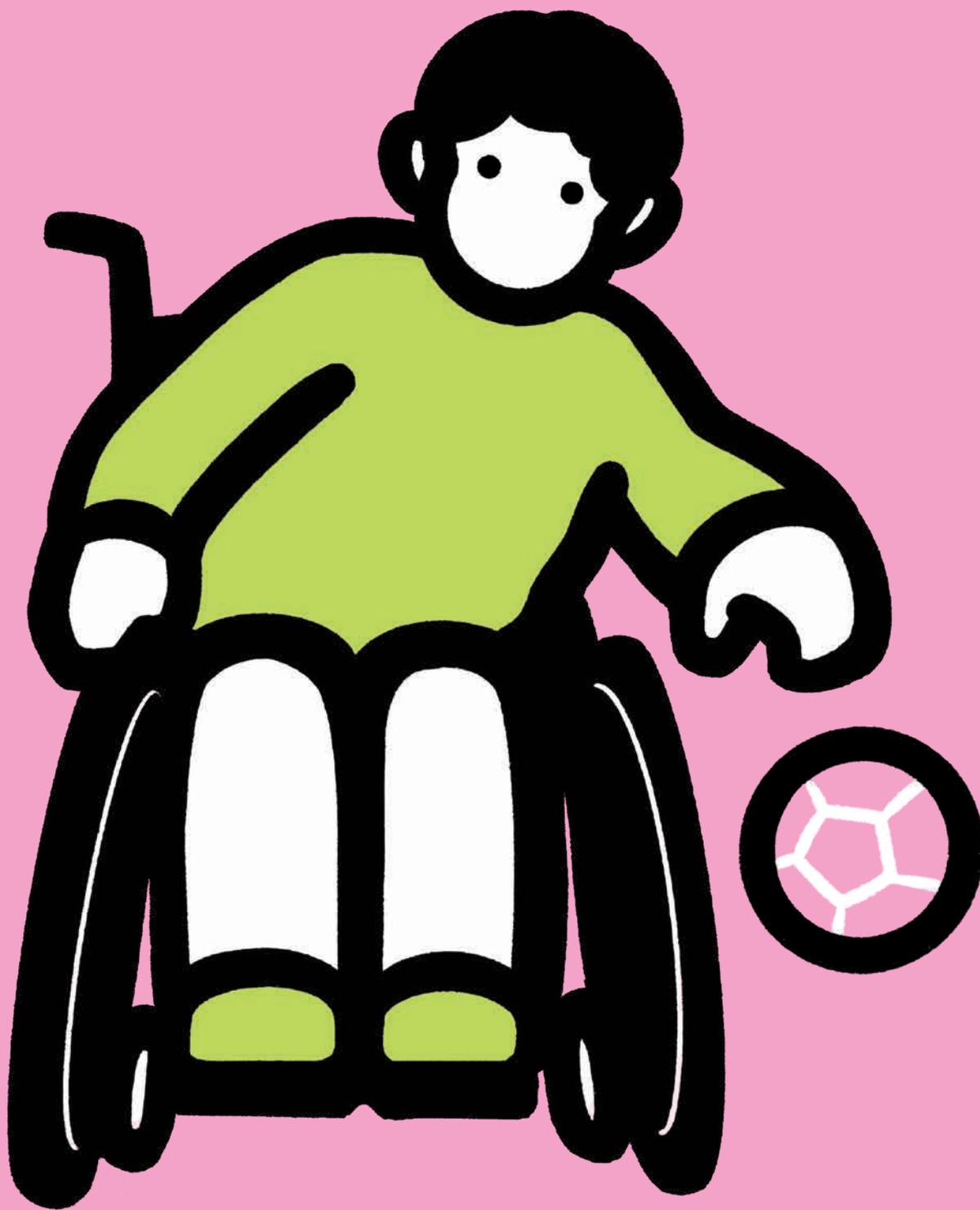


学研・教科の研究

# 体育・保健体育ジャーナル

第 28 号  
2025

Gakken



## 新連載

体育・保健体育の授業で、どうする？ 探究学習

第1回「探究学習をデザインするポイント」

久保賢太郎（玉川大学講師）

体験だけに留まらない

ボッチャの魅力と授業の実践例

村上光輝（2020東京パラリンピック ボッチャ日本代表監督）

連載 WITH SPORTS 今日和さん（女子相撲選手）



# 体育・保健体育の授業で、どうする？ 探究学習

## 第1回 (全4回) 探究学習をデザインするポイント



玉川大学講師 久保賢太郎

### 1 昨今の教育動向

現行小学校学習指導要領(平成29年告示)においては、学習者が生涯にわたって学び続ける資質・能力の育成を目指し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められています。また、各教科の学習においては教科固有の「見方・考え方」を働かせながら「深い学び」へと向かっていけるようにすることが重視されています。さらに、2022年度に施行となった高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説(文部科学省, 2018)によれば、探究的な学びを重視する観点から、従来の「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と改められました。加えて、中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」(中央教育審議会, 2021)によれば、主体的・対話的で深い学びの実現に向け「探究的な学習」の重要性が指摘されています。こうした動向を鑑みるに、学校教育における探究的な学びの実現は、大きなトピックの一つであるように思われます。少なくとも、大量の情報を学習者にトレースするような授業観はすでに過去のものといってよいかもしれません。

こうした教育政策や動向の背景として、先行き不透明な時代において未来を切り開き、持続可能な社会を多様な他者とともに創っていくための資質・能力の必要性が挙げられています。しかし一方では、児童・生徒の学習意欲の低下や、学習に対する当事者意識の欠如などといったネガティブな実態もあるようです(中央教育審議会, 2021)。加えて、ソーヤー(2016)に代表される学習科学の知見などから、学習者による知識構築のメカニズムやその重要性が授業実践を通して明らかになってきていることも挙げられるでしょう。こうした中で、階段型カリキュ

ラムに代表される目標—達成—評価型の伝統的な授業様式が上述の教育課題を解決する上で必ずしも有用ではないこと、そして、主題—探究—表現型の授業デザインにおいて学習者が自分(自分たち)で、学びを進め(統制感)、試行錯誤したり協働したりしながら、知識構築をすること。さらにそのプロセス自体を振り返り(Reflection)し、次の探究に向けた見通し(Anticipation)を持つことが重要となることが明らかとなっています。前掲の答申における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の理論的背景にジーマンほか(2014)による自己調整学習が挙げられている(溝上, 2020)のはそのためでしょう。

※ OECD の Education2030 のラーニング・コンパスでも、コンピテンシーなどを身に付けるプロセスとして AAR【見通し(Anticipation)—実行(Action)—振り返り(Reflection)】サイクルが示されている。

### 2 優れた事例のエッセンスに学ぶ

さて、このようなことを書くと、これまでの授業実践、とりわけ本稿の主題に引き寄せれば、従来の体育・保健体育実践の否定であるように受け取られる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。しかしながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善とは、我が国のこれまでの優れた授業実践の共通点から導き出された視点です(文部科学省, 2018)。例えば体育・保健体育における授業実践に関していえば、出原泰明(1981)による短距離走の実践及び実践の詳細な分析(岩田, 1997; 石田, 2001)に代表される、いわゆる探究的な学びを企図した実践はいくつか見られます。こうした優れた典型事例に隠された、探究的な学びに誘うエッセンスを抽出するとともに、目の前の子どもたちに合わせて、また教師としての意図や願いに根ざして、一人ひとりが日々の授業づくりに生かし、授業自体を振り返り、そしてネク

ストプランをたてる、不断の営みが重要になるでしょう。「主体的・対話的で深い学び」に根ざした授業改善においては、「日本全国どこの教室でも同じような授業になる」といったような事態はそもそも想定されていません。当然のことながら教師も違えば子どもも違う。そうした中で学習者の主体性が生きるような学習環境をデザインする。それなのに「授業の流し方」が同じになろうはずがありません。それぞれの教室においてオリジナリティがある。しかしながら、エッセンスは共有している。そうした両義性が、これからより一層求められてくるのではないのでしょうか。

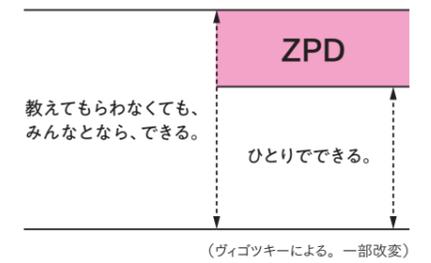
### 3 教師の仕事

そこで本稿では、探究的な学習の実現に向けた授業づくりを考える上でのポイントを3点、お示ししたいと思います。

#### (1) 課題の枠組みづくり=フレーミング

学習科学の知見(ソーヤー, 2016)によれば、人の思考は既有知識や既有経験がなければ働かないことがわかっています。では、どのようなときに思考が駆動するか。それは、既有知識で解決できそうだと、思えるトピックに出会った場合であるとされています。しかし、当然のことながら、明らかに「簡単すぎる」場合には思考は駆動しません。大人に「幼児とかけっこしてどうやったら勝てるか探究しなさい」と言ったところで、探究は生じないでしょう。一方では、「今から陸上100mでオリンピックを目指しなさい」と言われたら、それはそれで難しすぎます。では、どうしたらよいのでしょうか。

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、自分が一人でできることと、まだできないことの間にある、他者の助けによってできることと一人でできることの差分を「発達の最近接領域(ZPD)」と呼び、ZPDの範囲内にある課題に対して動機付けられるとともに、他者との相互作用を通じた学習が生じると論じました。また、アメリカの言語学者クラッセン(1982)は、すでに知っている言語レベルを少しだけ上回る課題(I+1の課題)に対して、思考が働き言語理解が促進されるとする「インプット仮説」を提唱しています。また、フィンランドの教育学者エンゲストローム(1999)によれば、学習が生じる契機となるのは、主体



がすでに持っている見方や考え方では解決できないような矛盾や葛藤との出会いであるといえます。例えば筆者は、小学6年生に対して、社会科の授業で「独裁より民主主義のほうがよいとされているのに、どうして戦争はなくなるのだろう」という問いを提示したことがありました。この授業では子どもたちによる大変活発な議論が展開されたのですが、このように「Aなのに、Bである」という矛盾をはらんだ問いや「概念崩し」にあたる問いも、探究的な思考を駆動させるスイッチになるかもしれません。

こうした知見から、学習者の探究サイクルを駆動させるための環境設定のヒントを得ることができます。簡単にいえば「できそうで、できない」や「Aなのに、Bである」といった問いや課題を、意図的に焦点化して提示することによる枠組みづくり(フレーミング)が欠かせません。裏を返せば、こうした枠組みが曖昧なまま、探究を求められたり、話し合いを求められたりしても、なかなか思考は駆動していかないのです。「とりあえず近くの人と話して」と言われて「え、何を?」と思うのと同じです。どういった既有知識を使えばいいのか、何が矛盾関係にあるのかが、わかりにくいからです。

授業づくりにおいては、まず「できそうで、できない」「Aなのに、Bである」という矛盾関係を課題として、さらにいえば「教科の本質」に迫るような矛盾を課題として提示し、学習者が教科の「見方・考え方」を使って矛盾を解決する。このようなイメージを描くことが重要になると考えています。

#### (2) 余白と見通し

上述のような課題提示がうまくいくと、学習者は動き出します。その際に重要になるのが、試行錯誤を保障する余白です。なぜならば、探究的な学びを通じた知識構築においては、思考過程をアウトプット(外化)したり、実際にやってみたり、うまくいかない点について他者と対話し

たりといったプロセスが重要となるからです(ソーヤー, 2016)。とりわけ運動学習においては「できた」という結果や活用する技術(ポイント)は同じでも、身体への落とし込み方や、いわゆる「コツ」が人によって異なります。自転車に乗ったときのことを思い出してみてください。補助輪を外していきなり完璧を求められたら、誰でも練習するのが嫌になります。ゆらゆらしてみたり、転んでみたり、まさに試行錯誤をしながら、段々と自転車に乗る身体知が形成されていきます。そうした過程つまり余白を保障するのが欠かせないのです。

ここで重要となるのが、学習者が解決のための見通し(Anticipation)を持てているかを見極め、判断する教師の力量です。この見通しの中身としては、①課題自体がわかっているか ②解決するために必要な先行知識が掘り起こされているか ③解決するための方法がわかっているか などがあられるでしょう。これらが学習者の中で見通せていると判断できる場合には、価値づけながら任せてもいいでしょう。一方で、こうした見通しが十分ではなく、困っていると判断される場合には、やはり教師は何らかの働きかけをする必要があります。前の授業で学習したことを思い起こさせる場合もあるでしょうし、タブレット端末などや板書掲示などに忍ばせておく方法もあるでしょう。あるいは、選択肢をあらかじめ提示し、その中から選んで最適解を見つけ出させるという方法を取る場合もあるかもしれません。

### (3) 振り返り(Reflection)

最後に、取り組んだ試行錯誤プロセスに対する振り返りが欠かせません。その際に重視すべき点として、以下の3点を挙げておきます。

1点目は、振り返り自体のアウトプットです。話したり、書いたりすることで、思考の外化が促されます。できれば、単元全体の振り返りが一覧できるような形(例えば、One Paper Portfolio Assessmentなど)にしておくと、自分の思考過程や取り組みの変化、学びの契機や他者との関わりなどが後から可視化でき、メタ認知の促進が期待できます。ただ、とりわけ小学生段階ですと、単なる感想めいた振り返りや結果の表記に終始してしまう事例も散見されます。書くべき事柄や課題を焦点化しておくことがやはり重要になると考えられます。

2点目は、ある課題に対する取り組みやそのプロセス

が適切であったのか否かを振り返ることです。それにより次に類似の課題に直面した場合にその方策を活用できるということを学ぶことができます。こうした思考は教訓帰納と呼ばれ、学習者の自己調整促進に有効であることがわかっています(深谷, 2023)。

3点目は、振り返りを通して次の見通しを見いだすよう支援することです。これは、先の自己調整学習における「自己省察」から「予見」への段階にあたります。

## 4 最後に

本稿では、体育・保健体育における探究学習が求められる背景と、そうした授業づくりにおけるポイントの一部をご紹介します。しかし、やや抽象度が高く「わかりそうで一わからない」のではないかと思います。

次回以降、授業実践としてどう落とし込んでいったらいいのか、学習者はどのように学ぶのかなどについて、実践事例を通して検討していきたいと思えます。

#### ● 引用・参考文献

- 中央教育審議会(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)。  
https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\_syoto02-000012321\_2-4.pdf(2025.03.20)
- エングストローム, Y. (1999) 拡張による学習：活動理論からのアプローチ. 新曜社.
- 深谷達史(2023)教訓帰納の活用を軸とした文章読解の個別学習指導. 教育心理学研究, 71: 237-252.
- 石田智巳(2001)体育科教育における運動技能と認識に関する研究. 博士論文(広島大学).
- 若田靖(1997)出原泰明の実践. 中村敏雄編. 戦後体育実践論：独自性の追求. 創文企画.
- 出原泰明(1981)高校・短距離走の実践から考える. 体育科教育, 29(8): 46-49.
- Figure: Original by Mitzub'ixi Quq Chi'j ZPD, Zone of Proximal Development, зона ближайшего развития. L.S. Vygotsky: Mind in society: Development of Higher Psychological Processes, p. 86, Cambridge, Mass.:Harvard University Press
- Krashen, S. (1982) Principles and Practice in Second Language Acquisition. Oxford: Pergamon.
- 溝上慎一(2020)令和の日本型学校教育における「個別最適な学び」「協働的な学び」についての概念的考察. 中央教育審議会教育課程部会報告.  
https://www.mext.go.jp/content/20201023-mxt\_kyoiku01-000010203\_2.pdf(2025.03.25)
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編. 東洋館出版社.
- 文部科学省(2018)高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説総則編. 東洋館出版社.
- ソーヤー, R. K.(編)森敏昭他(監訳)(2016)学習科学ハンドブック第二版第二巻：効果的な学びを促進する実践/共に学ぶ. 北大路書房.
- ジマーマン, B. J.・シャンク, D. H. (編)塚野州一・伊藤崇達(監訳)(2014)自己調整学習ハンドブック. 北大路書房.

# 体験だけに留まらない ボッチャの魅力と授業の実践例



2020東京パラリンピック ボッチャ日本代表監督 **村上光輝**



『中学体育実技』2025年度版(Gakken)に新しく掲載したアダプテッド・スポーツの一つにボッチャがあります。2020東京パラリンピックのボッチャ日本代表監督にして、全国の小中学校向けに体験授業を行っている村上光輝さんに、ボッチャの魅力や授業での取り入れ方、その際の様子などについてご紹介いただきます。

## 1 はじめに

私自身は小学校から大学までサッカー部に所属していました。大学4年のときにボッチャと出会い、代表コーチや監督を歴任、現在は全国にボッチャを広めるための活動を行っています。

今回は、現在私が学校で出前授業をしているときの方法を簡単にご紹介します。



## 2 授業の目的

授業の目的は、次の2点です。

- ①「楽しさ」「喜び」「自発性」に基づき行われる本質的な『スポーツそのものが有する価値』(Well-being)を知る
- ②スポーツを通じた地域活性化、健康増進による健康長寿社会の実現、経済発展、国際理解の促進など、『スポーツが社会活性化等に寄与する価値』に気づく

これらを子どもたちに感じてもらうために、私はボッチャの魅力を紹介しています。

## 3 ボッチャの魅力

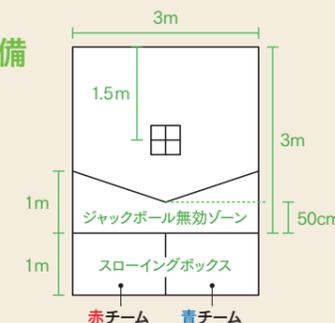
ボッチャは障害者のために考案されたスポーツですが、誰が行っても十分楽しいもの。また、チーム戦でもあるので、学校での取り組みに向いていて、かつふだんは運動

が苦手な子が輝くチャンスが多くあるスポーツなのです。

- 誰でも参加できる
- ルールがシンプルで覚えやすい
- 頭脳とチームワークで勝敗が決まる
- 作戦のバリエーションが豊富で一発逆転もある
- 仲間と協力したり高め合えたりできる
- パラスポーツを身近に感じることができる

## 4 体験の準備

「やってみたい」と感じてもらえたとこで、さっそく体験です。ボールとコートさえ確保できればすぐ始められるのも魅力です。



- **コート** ミニコート(上図。テープなどで作成)
- **試合** 2エンドマッチ
- **ボール** 1人1球<sup>※1</sup>
- **チーム分け** 1チーム5～10人(30人学級であれば約8人4チーム編成)。対戦相手の人数が異なっても、使用するボールの数が同数であれば公平なゲームができる。<sup>※2</sup>
- **ルール** 実際は細かなルールがありますが、まずは次のことだけ理解してもらいます。

- スローイングボックスの中から 遠いチームが投げる。(チーム内の投球順は決めておく)
- 投球中はコート内に誰も入ってはいけない。
- 先攻がジャックボール(白の的球)を投げ、そのまま先攻・後攻が1球ずつ投げる。
- その次からはジャックボールに 近いチームが投げる。(チーム内の投球順は決めておく)
- 近づけるだけでなく、ボールを押ししたり、弾いたり、コートの外に出したりしてもよい。
- 全投球終了後、ジャックボールに近いチームが勝ち。(1エンド終了。2エンドで約10分)

まずは上記ルールでやってみたと、ゲームを繰り返すなかで、子どもたちの発言をもとにルールを変えたり、工夫したりしていくのも問題ありません。

では、次のページで進行のポイントを確認しましょう。

※1 パラリンピックでは、チーム戦では1人2球、個人戦では6球投球するが、1人1球の試合を行うことで協力体制ができる。

※2 パラリンピックでは1チーム3人、1エンド6球で実施するが、1チーム6人以上で、ボール数が多くなっても盛り上がる。

(その他の注意点) 審判用具がある場合、コートに配布せずに、指導者(先生)に質問できるようにする。審判用具で遊んだり、けがをしたりすることがある。(安全管理)

## 5 進行のポイントと先生役割

説明を聞くだけでなく、体験したほうが学ぶことが多いもの。できれば、始業5分以内に試合開始がベストです。

先生が説明しすぎると、発言など児童生徒の自発性を抑えてしまう場合もあります。先生の役割は、試合の組み合わせを明確にし、授業内で試合が最後まで完結できるように時間管理することです。

## 6 審判は全員で

審判の役割を設けず、全員で判定するようにすると、ルールも確かめ合う様子が見られるようになります。「難しい判定は両チーム相談で決める」「ペナルティーなし、反則がないようにみんなで声を掛け合う」。この2点を説明して、試合進行を見守ることが児童・生徒の主体的な行動を引き出します。

## 7 ポッチャを楽しむポイント

ポッチャの楽しみ方はさまざまですが、大きく「技術」「戦術」「協力」に分類できます。

### 技術(する)

- 上投げ、下投げ、座位、立位、膝立ち、自分のフォームを探す
- ボールを近づける、押す、はじく、乗せるなど技を考える

### 戦術(みる・支える)

- 得点の方法、失点をなくす方法を考える(ジャックボールの位置)
- チームの戦力を考える(近づけるのが得意か、はじくのが得意か)

\* 投球フォームや作戦の考え方は一人ひとり異なるもの。多様性の理解とともに、自分の思いを伝える大切さに気づくことができます。

### 協力(支える)

- 伝え方、答え方、タイミングを考える

\* 話し合う時間の長さは1分以内にしましょう。それ以上だと悩んでしまいがちです。

行いながら自分で気づくこともありますし、友達や先生にヒントを求めることも大切です。私が選手の場合は、自分がイメージする投球、作戦を話してから意見を求めるようにします。最初に意見を聞いてしまうと迷ってしまい、体に力が入らなくなってしまうたり、緊張して逆に力が入り過ぎてしまったりするからです。

## 8 子どもたちの変化や反応

児童・生徒が試合を行う中で、次のような変化や反応が見られるようになります。

まず、楽しさ、喜び、自発性により、コートを見守る児童・生徒で囲む姿が見られます。チームメイトの顔が見える、声が聞こえる状況から、「する」「みる」「支える」体験につながっていきます。例えば、作戦を考えたい、伝えたい、聞いてみたい。投球フォームを考える、フォームと一緒に考えたい。友達に協力したい、応援したい。などです。

次に、試合を何度も重ねるうちに、投球も作戦もトライアンドエラーを繰り返して、上達に向けたプロセスを大切にできるようになります。勝つことの喜びだけでなく、負けて気づくことの大切さを知ることができます。

また、行われているプレイの難易度がわかるようになり、チームメイト、対戦相手を問わず、スーパープレイに自然と声が出たり、相手を称賛、応援したりするようになります。

## 9 最後に

授業を終えた児童や生徒からは、「友達と仲よくなるスポーツ」「最初は難しかったけど、授業中にうまくできるようになった」といった声が、先生からは「投球でも、作戦でも、応援でも、誰もがみんな活躍できるスポーツ」「する、みる、支えるが体験できるスポーツ」「思った以上に盛り上がる。クラスマッチに採用したい」といった声をいただきます。

「スポーツのもつ価値」への気づきにつながる、ポッチャをぜひ体験してください。

『中学体育実技』2025年版(Gakken)では、ポッチャを授業で扱えるように掲載しています

p.169  
ポッチャのページ



## 中学校保健体育科保健分野「健康と環境」対応教材



# 水と健康

カラダの水分マネジメント

体内を循環する水分、「体液」は、私たちの生命に関わる様々な役割を果たしています。2024年の報告によると、日本の子どもたちの多くが春と夏の体水分状態がやや不足気味であることが分かりました。<sup>\*</sup> 熱中症対策に留まらず、カラダと水分の関係、知らず知らずのうちに失われている水分について考え、学んだその日から生徒一人ひとりが自身のコンディショニングを実行できるような1時間分の教材を作成しました。生徒らが主体的に、カラダの水分が生命や健康にかかせないことを学び理解するための教材として、ぜひご活用ください。

<sup>\*</sup> T Amano et al. Appl Physiol Nutr Metab. doi: 10.1139/apnm-2023-0464, 2024



### 教材の特長

#### 特長①

身近な問いかけから  
気づきを与える



#### 特長②

重要な情報は  
わかりやすい動画で解説



#### 特長③

主体的な行動変容を  
促す内容



### 教材内容

#### 教材スライド

対象学年：中学校1～3年  
授業時間：1コマ(45分)



水と健康について知るために、まずはクイズから入り、カラダと水の間を学びます。自分のカラダから水分が失われる仕組みや、自身の脱水の確認方法を理解することで、生徒一人ひとりの行動変容を促す内容になっています。

#### 活用指導案 (スライド活用編)

教材スライドの活用方法を知ることができます。各スライドの簡易的な解説を記載しています。

#### 活用指導案 (授業展開例)

教材をどのシーンで使用すれば良いかなど、場面の案内や、45分内の指導タイミングなどを記載しています。

#### ワークシート (配布用)

教材スライドでのクイズや気づいたことを記載するシートとしてご活用ください。

#### 動画

動画1：4分22秒  
動画2：通常版9分14秒、  
短縮版7分30秒

教材スライドの合間に動画を視聴できます。「カラダと水分」および「水分を摂らないとどうなる？」の2種類があります。

#### 教材取得方法

詳しくはWEBサイトをご覧ください



<https://www.otsuka.co.jp/education/hs>

教材についてのお問い合わせ

大塚製薬学校教育事務局 TEL 03-5495-7585 (9:30~16:30/土・日・祝日を除く)  
〒140-0001 東京都品川区北品川1-10-4 YBビル6階 株式会社NIA内 メールアドレス:jimukyoku@nia.co.jp

本教材は 大塚製薬 と Gakken で制作しました。

「スポーツと生きる人」から、スポーツの今とこれからを知る

# 今日和さん

JICA日系社会青年海外協力隊（職種・相撲）



Profile ● こん ひろゆき

1997年、青森県生まれ。小学1年で相撲を始め、18歳以下の女性力士が出場する世界女子ジュニア相撲選手権大会の重量級で2014年から2連覇を達成。シニアに活躍の場を移した世界選手権では無差別級で18年、19年と準優勝を果たした。「世界に相撲を広げる」ことを目標に掲げ、相撲道に邁進する姿は『相撲人』という短編ドキュメンタリー映画になった。24年4月から海外協力隊としてアルゼンチンで相撲の指導に取り組んでいる。

幼少期から相撲に親しみ、学生時代は相撲部で男子とともに稽古に励んできた今日和さん。女子相撲の世界大会で準優勝するなど好成績をおさめ、現在はJICAの海外協力隊としてアルゼンチンで相撲の指導と普及に取り組んでいる。相撲道に邁進する今さんに、その原動力や相撲から学んだこと、今後の夢などについて聞いた。（取材・文／荒木美晴）

\*\*\*

青森県の鱒ヶ沢町出身。小学校で校内相撲大会が開かれるなど、相撲が盛んな地域だ。今さんも小学校入学と同時に兄が通う道場で相撲を始めた。稽古は厳しかったが、性別や年齢、国籍を問わず、身ひとつで切磋琢磨できる環境が心身を育んだ。夢は、相撲を世界に



アルゼンチンで生徒に稽古をつける今さん(右)

広めることと、オリンピック競技にすること。「それなら、楽な道に逃げてでも目標達成はできないぞ。苦しい稽古に耐えて自分の道を進んだ人になら、教えられることがあるんだ」。道場の監督にかけられた言葉を大切にできた今さんは、高校卒業後は国際関係が学べる立命館大学に進学。名門の相撲部に籍を置き、自分ができることを模索し続けた。在学中は女子世界選手権で2年連続決勝に進出。その実績を掲げて国際相撲連盟の選手委員となり、普及活動を通して視野を広げた。

大学の卒業後は相撲部がある企業に就職。仕事と両立するなかで、「いつかリーダーシップを身につける機会を得たい」と考えていた今さん。偶然、JICAの海外協力隊がアルゼンチンで相撲を指導できる人材を募集していることを知り、迷わず応募。見事に合格し、休職して2024年4月から首都のブエノスアイレスで活動している。

今さんが稽古をつけるのは、始めたばかりの初心者を含む18歳から40代の大人。稽古ではマットを使用する。日本と異なる環境のなかでの指導は決して簡単ではないが、思わぬ副産物があった。土俵では足の指全体で土を掴んで重心を作るが、マットでは四股を踏むものも不安定になってしまう。ところが、それに耐える身体の使い方を一人ひとりのレベルに合わせて教えていくうちに、今さん自身の身体の軸も安定感が増し、上達を感じるようになったそうだ。

生徒には、自分と相手の2人しかいない空間が好きだという人や、自分に集中する時間を作るために通う人など、勝利至上主義とはまた違う形でスポーツを人生に取り入れている人が多いという。今さんは「すぐく学ぶことが多い」と語り、「彼らの考えを尊重しつつ、日本の「相撲道」の教えや体育教育の良さをアルゼンチンで提供していけたら」と、言葉に力を込める。そして、こう続ける。「アルゼンチン国内での相撲は約40年の歴史があります。でも、指導者が高齢化したり、維持が難しくなったりして、かつてあった土俵も今はありません。それでも、相撲には国技的スポーツのサッカーと同じくらい人気になる力がある、と私は思っています。相撲を理解してくれる人を増やしていきたいですね」

日本においては、2027年度以降は全国中学校体育大会で相撲が実施されないなど逆風が吹いている。今さんは変革を起こすためにも、来春に帰国後はすぐにでも競技者として復帰し、30歳で迎える2027年の世界選手権で世界一になるプランを描く。「結果を出して相撲の魅力を伝えたい。私が相撲で人生を切り拓けたように、私も子どもたちの可能性を広げたいんです」。勇往邁進、その姿で未来を照らしていく。



盆踊りイベントでは相撲のデモンストラーションを行ったという

学研・教科の研究 体育・保健体育ジャーナル 第28号 令和7(2025)年5月発行

『小学校体育ジャーナル』(通巻114号) 『中学校保健体育ジャーナル』(通巻140号)

● お問い合わせは、「小中教育事業部」へ  
〒141-8416  
東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル  
TEL.03-6431-1151

● 「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版は、WEBページから  
学研 学校教育ネット  
<https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>



発行人 木村昌弘  
編集人 麻生征宏  
発行所 株式会社Gakken  
デザイン 西田美千子  
表紙イラスト ミヤザキ  
印刷所 株式会社広済堂ネクスト



※この冊子に記載されている会社名、製品名等は、各社の登録商標または商標です。  
※この冊子は、環境に配慮して作られた紙、植物油インキを使用し、CTP方式で印刷しています。